

蠟山先生の想い出

川島慶雄・千里金蘭大学学長

(元OSIPP教授、元研究科長)

蠟山先生と日常的に親しくお話しするようになったのは、多分平成4年頃のことだと思う。蠟山先生が経済学部長の前半、私が法学部長の後半を務めていた頃、OSIPPを作る話が持ち上がった。それ以前にも、当時の金森総長の示唆で、法と経が協同して何らかの新しい組織を作るという話があり、私が蠟山先生にそれをもちかけたときは、先生は頑として受け入れられなかった。経は単独で十分やっていけるという信念を持っておられた。しかし、教養部の解体が現実のものになるにつれて、法経を核とする独立大学院の設置構想が再び持ち上がったときは、先生もこれを受け入れられた。このように、一見頑固で、陰で「鍋奉行」と呼ぶむきもあったが、情勢に応じた柔軟な対応ができる人でもあった。

OSIPPという名称にしても、最初はInternational Public Systemとして文部省に申請することにしてしたが、International Public Policyとすることを強く主張されたのも先生であったように思う。そして、Gを付ければゴシップだといって、(そうはならないのに)喜んでおられた。また、社会人の学生のために夜間のクラスを開くことになり、千里中央のライフ・サイエンス・センターに教室を設けることになったのも先生の発案ではなかったかと思う。このように、先生は今日のOSIPPの基礎を築くことになる斬新な発想を次々と出され、草創期において強力なリーダーシップを発揮された。

楽しかった思い出もある。平成4年の夏休みだったと思うが、たまたま蠟山先生と私は別の仕事でロンドンに滞在していた。一日テニスをやろうということになった。それも、ウインブルドンのセンターコートで。そもそも、ウインブルドンは会員制なので、会員の紹介がなければ入れない。そこで、先生の知人を介して、もと英国デ杯のキャプテン氏に同行してもらい、四人でダブルスをやった。さすがに、センターコートは使わせてもらえず、芝だけでも触ろうとしたが、警報で追い出された。ダブルスはキャプテン氏とペアになった組が常に勝ったことは言うまでもない。

平成9年、私は定年退官となり、間もなく蠟山先生も高岡短大学長としてOSIPPを去られ、お目にかかる機会も途絶えた。最後にお会いしたのは、OSIPP 5周年の記念式典のときであった。先生はまだお若く、これからも各方面でのご活躍を期待していたのに、あまりにも早いご夭折、残念でならない。心から先生のご冥福をお祈りする。

蠟山昌一が逝った

林敏彦・放送大学教授

(前OSIPP教授、元研究科長)

2001年11月、日経新聞のコラム「交友抄」に蠟山昌一のことを書いた。編集者はそれに「あこがれの同士」という見出しをつけてくれた。その中で最後まで迷ったくだりがあった。「もしも蠟山さんが亡くなったら、私に追悼文を書かせ

追悼・蠟山先生

OSIPP生みの親である高岡短期大学学長、大阪大学名誉教授、蠟山昌一氏が六月一九日午後六時二〇分、特発性間質性肺炎のため死去された。享年六三歳。同氏は一九三九年生まれ。東大経済学部を卒業後、東大助手から六九年に阪大経済学部講師に。同助教授、教授、経済学部長を経て、九四年新設されたOSIPPに、九八年から高岡短期大学学長。専門は金融論。早くから政策研究の大学院構想を唱え、川島慶雄・初代研究科長とともにOSIPP創設に尽力された。早過ぎる逝去を悼み、親交の深かった教員、学生から追悼の言葉を寄せてもらった。

て欲しい。」本音だった。編集者は私の意図を分かってくれた。でも、縁起でもないと思う読者もいるでしょうね、とも言った。そうだろうな、と思った。この一文は削除した。

蠟山昌一は私のあこがれの人だった。神戸商科大学の助教授をしていた私には、東京や大阪などいくつかの大学から移籍の誘いが来た。最後に来たのが大阪大学の経済学部だった。2つの理由で私はそれに飛びついた。1つは自宅を引っ越さなくてもよいということ、もう1つは蠟山昌一だった。85年頃、蠟山昌一は助教授の兄貴分で、中谷巖、本間正明、猪木武徳、宮本又郎といった助教授らに慕われ、大学の内外でさっそうと振る舞っていた。

蠟山昌一の研究室や書斎は本で足の踏み場もなかったが、彼は書斎派の学者ではなかった。自らを「(アカデミックな)やくざ」と呼ぶ蠟山昌一は、「経済学」学を最も忌み嫌った。経済学部の提供科目の名称から「学」と「論」を取り去ったのも彼である。金融論ではなく金融を、財政学ではなく財政を、教育と研究の対象にすべきだと主張した。けれども彼は、理論研究に対しては満腔の敬意を払った。

阪大に移籍してから蠟山昌一とよく話す機会があった。釣りのこと、山登りのこと、自転車のこと、テニスのこと、麻雀のこと、政策構想フォーラムのこと、サントリー文化財団のこと。彼はそのとき決して無理に人を自分の領域に誘い込もうとはしなかった。私はいつ

も聞き役に回っていた。

蠟山昌一の叔父上は大政治学者の蠟山政道で、蠟山家は群馬県安中市の造酒屋の出身だった。私の妻の母方の祖父で経済学者の大塚一郎も安中の造酒屋の出身で、2人は親友だったという。遠い親戚同士が親友だったという、ただそれだけのことで私はいつそう蠟山昌一に親しみを感じていた。

国際公共政策研究科が立ち上がる少し前、蠟山昌一は再婚した。洋子さんは私の研究室で秘書をしていていた。帰路、私の車に同乗した彼女は「蠟山先生と一緒にいると、なんだか落ち着きます。」と告白した。蠟山昌一は「俺は、彼女にふさわしくない。」とたじろいだ。天下の蠟山が洋子さんの前で小さくなっていった。二人は神戸で結婚式を挙げ、私はそのパーティの司会を務めた。あれからまだ10年しかたっていない。

昨年の夏、金融システムの専門家だった蠟山昌一は、破綻した日本の金融システムの再生プログラムに心血を注いでいた。高岡短期大学の学長として大学の合併と独立法人化を陣頭指揮しながら、土曜日も日曜日もなく霞ヶ関の金融庁に通い詰っていた。それが蠟山昌一の命を縮めることになったのかどうかは分からない。

蠟山さん、仕事人間としては本望だったかもしれないけれども、あなたを知る人間にとっては、あなたは日本の金融システムよりもはるかに大事な人だったのですよ。

野村 美明・OSIPP 研究科長

OSIPP 創立 5 周年を記念する活動報告書に、「“OSIPP 大立者”の語る創設秘話」という記事が掲載されている。「大立者」とはもちろん蛭山先生のことである。なんといっても先生は「国際公共政策研究科」の名付け親なのだから。

OSIPP の創立準備に忙しかった 1992 年秋、蛭山経済学部長から、「国際公共政策研究科設立構想案」が示された。これを受けた松岡博法学部長や私たち法律家は、“public policy”は「公序」のことだからイヤだと、「国際総合政策研究科」と「国際公共システム研究科」という対案を示した。結局、文部省（現文部科学省）に行ったら「総合政策は他の大学にもある」とか「専攻名はともかく、研究科名にカタカナはどうも」と言われたとかで、現行名に落ち着いたのである。

このときに、蛭山先生が、これからの研究科名は英語でも通用しなければいけない、むしろ英語から日本語の名称を考えようと提案された。その時のメモには、“Osaka School of International Public Policy and Government”とある。“University”という言葉がないのは、“Kennedy School of Government”のように、優れた大学院は大学の名前がなくても通用するという蛭山理論に、その場にいた全員が盛り上がったからである。“Government”は英語名から消えてしまったが、われわれがめざしてきたのはまさに“Public Policy and Government”であった。

95 年 1 月 19 日の教授会は、阪神・淡路大震災の翌々日の木曜日であった。倒壊したブロック塀で自動車が出せず、自転車道で息を切らして駆けつけると、イ号館（29 年に建築された阪大最古の建物）の 1 階にあったクラシックな大会議室にはすでに蛭山先生の姿があった。大きな被害を受けられた先生がいつもと変わらない様子で議論されていたのはさすがだった。このときの先生の登山スタイルは忘れられない。

教師としていまだにまねができないのは、先生が廊下でもエレベーターの中でも、「どうだい、元気にやってるかい」と学生に気軽に声をかけられていたことだ。院生室がイ号館にあったときも、ときどき部屋にあらわれては「何か困ったことはないかい」と話しかけられていた。本間正明経済学研究所教授（元 OSIPP 教授）によれば、大学院生の時、蛭山先生が「阪大に赴任された日、ふらりと院生室にあらわれ、気軽に声をかけてくださった」そうだ（もっとも、蛭山先生によれば、赴任直後に院生室に連れられていったら、えらそうな質問をする院生がいて、大変なところへ来てしまったと思われるそう）。69 年のことである。「颯爽としたリベラルな態度」は終生変わらなかったのだ。1 人の学者がいかにかたくさん人間に感動と勇気を与えることができるか。蛭山スタイルは並の学者がまねすることができない理想像であるが、われわれの夢と希望であり続けるだろう。

98 年春、高岡に飛つ先生に別れを惜しむ教員や学生に、6 年後には阪神間に戻ると宣言されていた。その 04 年もすぐそこだ。われわれは、学者、教師のモデルとして、蛭山先生の姿をいつまでも追いかけるだろう。現実裏付けられた理論、理論に裏付けられた実践を現実のものとするために。

落合大輔・格付投資情報センター
シニア・アナリスト（OSIPP1 期生）

先生。先生はもういないのですね。ただたくさんお話ししたいことがありました。相談したいこともありました。子どもも見て頂きたかったです。もっと早く高岡を訪ねるべきでした。悔やんでも悔やみきれません。

先生。先生との思い出は、研究指導に関するものばかりではありません。むしろ、食事や遊びに連れて行って頂いたことの方が多いくらいです。テニスのことや、すき焼きパーティーのこと、甲子園球場裏の小汚い中華店のこと、石橋のイタリアンのこと（あんなにワインをガブ飲みする人は先生以外には見たことがありません）…。阪神大震災の際には、奥様のご両親「救出」のために、六甲まで車をお出したこともありましたね。

先生。それでも僕が一番感謝しているのは、ゼミの後も居酒屋での我々の稚拙な議論に付き合ってくれたこと、そして、修士論文を最後まで読んで「てにをは」まで直して下さったことです。先生には文章の重要さを教え込んで頂きました。しっかりした文章を書かなければ、どんなによいことを考えても、どんなに優れた分析をしても伝わらないと、何度叱られたことか。

先生。先生が残して下さった OSIPP との縁を大事にして、少しでも OSIPP の発展に貢献できればと思っています。天国から見守っていて下さい。そして、その人懐っこい笑顔で、夢の中で叱咤激励して下さい。

先生のご冥福を心からお祈りします。

恩師を偲び、恩師に捧げ

胡昕・オリックス海外事業部（OSIPP3 期生）

まさか初めての富山への旅が、生涯の恩師とお別れをする旅になるとは思いもしなかった。あまりにも突如な出来事で、ただ信じられなかった。お葬式会場の遺影に写った先生の優しい笑顔はとても懐かしく、今もすぐ元気な声が聞こえてくるような気がした。

私の世界観、人生観を変えた存在であった蛭山先生と最初に出会ったのは 8 年前のことだった。OSIPP 入学の前年に勉強のアドバイスを求めて突然、先生を訪ねた。先生は日本語も金融の知識もおぼつかなく、飛び込みで来た私を温かく親切に迎えて下さった。ど素人の素朴な質問に対して一つ一つとても丁寧に分かりやすく説明していただいた。その後、幸運にも先生の門下生として OSIPP に入れた。しっかりした問題意識を持ち、分かりやすく金融論を語ろうという蛭山流の薫陶を受け、厳しく、楽しく勉強ができた。生活面においても、先生はいつも優しい気配りを忘れず、お正月や夏休みに故郷に戻れない留学生の私たちがホームシックにならないよう、ご自宅へ招いてくださった。

念願の修了証書を手にした日本の社会に飛び立とうとする私は、先生から一冊の本を頂いた。先生が編集をなさった『21 世紀へのライフデザイン - 生活から人生へ』という本だった。そのカバーに「With warm heart and cool head」と書かれていた。この言葉は私が物事に挑戦するときの原動力になり、座右の銘にもなった。

富山からの帰路、車窓には絨毯のような緑一面の田園が広がった。その安らかな、のどかな風景を見るとなぜか、また涙があふれた。「先生、天国でゆっくりゆっくりとお休みになってください。本当にお疲れ様でした」。